

「来れる」「見れる」という可能表現

古 江 尚 美

はじめに

「来れる」「見れる」など若者の乱れた言葉の代表のように言われる、いわゆる「ら抜き言葉」については、「動詞に可能の助動詞『られる』がついた『食べられる』『出られる』『見られる』などから『ら』を抜いた、『食べれる』『出れる』『見れる』などの言い方の称。文法的には破格。」(デジタル大辞泉)というのが現在でも一般的な見方であろう。当の若者たちもそう思い込み、どこか後ろめたい気持ちを抱えながら、使っているように見受けられる。だが、受け身や尊敬のときには、「食べられる」「出られる」「見られる」を用い、「食べれる」「出れる」「見れる」とは決して言わないことから、単に発音の便宜のためだけに、「ら」が抜けたくずれた形でないことは明白である。そのため、可能の場合だけに見られるこの形を可能動詞の一形態として認める専門家もかなり以前から存在するのである。このいわゆる「ら抜き言葉」について、問題点を整理し、現代語の中でどのように捉えるべきか、考察する。

1. 先行研究

いわゆる「ら抜き言葉」については、これまで様々な研究が行われてきた。張麗(2009)は、これらの先行研究をまとめたうえで、未解決課題として対人コミュニケーションにおける「ら抜き言葉」の機能を考察している。ここで重ねてそれらを細かく紹介することはしないが、多くの先行研究の中でも、単純化と明晰化が「ら抜き言葉」の生じた理由だとする井上史雄(1998)の説は見るべきところが多い。

井上(1998)は、「ら抜き言葉」は方言から始まり、100年近くかけて少しずつ拡大していったという。新しい言葉が都会から地方へ広がるという常識に対し、逆に地方から東京へ言葉の流入が多く見られるとし、その一例だというのである。また、「来れる」「見れる」など音節数の短い動詞から「ら抜き言葉」が進行したことも指摘している。そして、「ら抜きを認めない20世紀末の標準的日本語は、言語変化の中間段階」だという。つまり、「ら抜き言葉」の普及は歴史的变化の過程だというのである。変化の理由の一つとしては言葉の単純化

を挙げている。五段動詞と一段動詞に「れる・られる」がついた形「読まれる」「見られる」から「ar」を抜くと、「yom(ar)eru」「mir(ar)eru」「読める」「見れる」ができあがる。「ar抜き（アル抜き）」といえば、五段動詞にも一段動詞にも同じ説明が可能だということである。これは直観的には終止形で考えるほうがわかりやすいだろう。「読む」が「読める」になれば可能の意味が付け加わるのだから、「見る」も「見れる」で可能になるというほうがわかりやすく、これほど普及した理由もそういう類推作用が働いたのではないだろうか。

もう一つの理由として挙げられているのは、受身・尊敬と可能の区別が付きやすいという明晰化である。尊敬のつもりで「起きられますか」と言ったのに、「起きることができるか」という可能に取られればとても失礼なことを言ったことになる。可能の場合は「起きれますか」ということになっていれば、その危険を回避できるというのである。

2. 助動詞「れる・られる」／「る・らる」／「ゆ・らゆ」

なぜ、「文法的には破格」と言われるのかという点を整理する。助動詞「れる・られる」は、上代から使われている助動詞である。中世において動詞の活用は大きく変化し、上下2段活用が1段活用になる。動詞型に活用する助動詞も例外ではなく、現代では「読まれ（ない）・読まれ（た）・読まれる・読まれる（こと）・読まれれ（ば）・・・」とラ行下1段活用をしているが、上代・中古では、「読まれ（ず）・読まれ（たり）・読まる（。）・読まる（こと）・読まるれ（ば）・読まれよ」のようにラ行下二段活用「る・らる」であった。この活用の変化は、ほとんどの活用語に見られるもので、語の本質は変わらず、上代から現代まで変わらず使われ続けている息の長い助動詞だと言えるだろう。以下で、この「れる・られる」、古文では「る・らる」の接続・意味を整理する。さらに古形と考えられる「ゆ・らゆ」についても見てゆく。

2-1 助動詞「れる・られる」「る・らる」の接続

「れる」と「られる」は同じ意味機能を持ち、接続する動詞が五段活用とサ変の場合、「読まれる」「される」のように未然形に「れる」が、一段活用とカ変の場合、「起きられる」「食べられる」「来られる」のように未然形に「られる」がつく。つまり、一段活用とカ変には「ら」が必要なのである。五段活用は母音の変化によって活用するのに対して、一段活用は語尾に「る」「れ」というラ行の語尾がついて活用する。同様に「れる」がつくときも「ら」を必要とするということもできよう。

古文でも同様に、四段活用（ナ変・ラ変も含めア段の未然形を持つ）動詞には、「読まる」「死なる」と未然形に「る」が付き、一段活用・二段活用には、「見らる」「いでらる」「起きらる」「寝らる」のようにイ・エ段の未然形に「らる」がつく。カ変も、現代と同じく、未然形「こ

に「らる」がつく。サ変は古文の未然形は「せ」で「せらる」となる。

2-2 助動詞「れる・られる」／「る・らる」の意味

この助動詞は、受け身・尊敬・可能・自発の四つの意味があるとされている。その四つの意味、受け身・尊敬・自発・可能、の例としては次のようなものが挙げられる。

【受け身】

上代から使われている。

唐の 遠き境に 遣はされ ・ ・ ・ (『万葉集』)

宮仕所にも 親はらからの中にも 思はるる思はれぬがある ・ ・ ・ (『枕草子』)

現代でもよく使われ、「ら抜き」になることはない。

辺境に派遣される。

人にかわいがられる。

姿を見られた。

ケーキを妹に食べられる。

【尊敬】

この用法は、上代にはなく、中古から始まる。現代では見られない命令形の例もある。

これはいつもよりよく縫はれよ。(『落窪物語』)

現代語で敬意を表すときは「お～になる」の形や、「いらっしゃる」「召し上がる」などの敬語動詞を使うことも多いが、それらより比較的軽い尊敬表現として使われる。

新聞、読まれますか。

どうされました？

朝早く、起きられるんですね。

しかし、これらは、使い方によっては可能や受け身と誤解されることもある。

【自発】

これも、上代から使われている。

子らはかなしく 思はるるかも (『万葉集』)

秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ 驚かれぬる (『古今集』)

現代でも使用されているが、

故郷が思い出される。

亡き人が偲ばれる。

上のように「思う」「思い出す」や「偲ぶ」など特定の動詞につく場合のみであり、使用は

限定的である。

【可能】

これも上代から見られる。

吾妻は いたく恋ふらし 飲む水に 影さへ見えて 世に忘られず (『万葉集])

(「忘る」は上代では五段活用で「わすら」が未然形)

しかし、現代では、「五段動詞+れる」が可能の意味ではほとんど使われなくなっている。

漢字が読まれる (?)

漢字が書かれない (?)

携帯電話は使われません (?)

五段動詞は、下一段化すると可能の意味が付け加えられるという現象が中世から見られ、近世に一般化された。この、ほとんどの動詞に見られる現象を無視することもできず、「読める」「書ける」という下一段動詞は、「可能動詞」として学校文法でも認められ(これを言葉の乱れという人は現代では存在しないだろう)ている。次に例を挙げる。

漢字が読める。

漢字が書けない。

携帯電話は使えません。

この可能動詞を使用するため、五段動詞についての「れる」は、現代では可能の意味ではほとんど使われなくなってきたと思われる。

また、サ変動詞の場合、

静かによく勉強される (?)

現在、使用されません (?)

上のように言うことはまずない。

静かによく勉強できる。

現在、使用できません。

このように「する」を可能にする場合は「できる」という本来別の動詞を使う。

それに対して上下1段活用・カ変は、古典文法を受けつぎ、未然形に「られる」がつく。

漢字が覚えられる。

納豆が食べられるようになった。

何時でも来られる。

上のようにいうのが、正しい日本語ということになっているが、問題の「ら抜き言葉」は、ここに生じているのである。このように整理してみると、「覚えれる」「食べれる」「来れる」が誕生する自然の流れが見えてくるようである。

2-3 上代の助動詞「ゆ・らゆ」

前段で下二段に活用した「る」の上代の例も見てきたが、上代には「らる」の確例は見られない。そのかわりに、さらに古い形とされるヤ行下一段活用「ゆ・らゆ」という助動詞が使用されている。

白玉は 人に知らえず 知らずともよし (受け身、『万葉集』)

知らえぬ恋は 苦しきものぞ (受け身、『万葉集』)

山越えて 海渡るとも おもしろき今城の中は 忘らゆましじ (可能、『日本書紀』)

天離る 鄙に五年 住まひつつ 都の手振り 忘らえにけり (自発、『万葉集』)

妹を思ひ いの寝らえぬに 秋の野にさ牡鹿鳴きつ 妻思ひかねて (可能、『万葉集』)

これは「る・らる」と意味も接続も同じで、行が変化しただけの同じ助動詞とみることができる。「知る」「忘る」という四段動詞には「ゆ」がつき、「寝(ぬ)」という下二段動詞には「らゆ」がついている。ただし、上代でもすでに用例は限られており、「らゆ」の例は「いの寝らえぬに」のみであり、「ゆ」も使用例は多くない。

しかし、現代、よく使われている動詞「見える」「聞こえる」「覚える」の前身は「見ゆ」「聞かゆ→聞こゆ」「思はゆ→思ほゆ→おほゆ」であり、これらが中世の一段化現象によってヤ行のまま下一段活用となったものである。また、連体形だけが残り、連体詞として用いられる「いわゆる」「あらゆる」も「言ふ」「あり」の未然形にこの「ゆ」の連体形「ゆる」がついたものから生まれている。これらのことから、さらに時代を遡れば、通常用いられる助動詞だったと推測される。

2-4. 「見ゆ」→「見える」

上代から使われている「見ゆ」は、「聞こゆ」「おほゆ」などと同様一語の動詞として扱われる。この場合の「ゆ」は助動詞ではなく、接尾語と考えられている。「聞こゆ」も「聞かゆ」から音韻変化しており、「おほゆ」も「思はゆ」→「思ほゆ」→「おほゆ」と変化していることから、助動詞というより、接尾語と考えるのが妥当であろう。だが、意味は「見る」に自発や可能、受け身の意味が付け加わったものであり、助動詞「ゆ・らゆ」と同類と考えられる。助動詞「ゆ・らゆ」の接続は、「る・らる」同様、一段動詞には「らゆ」がつき「見らゆ」となるべきはずが、「見ゆ」となっているのは、古い時代の「ら抜き言葉」とも言えるのではないだろうか。

【自発】…「見える・目に映る」の意

千葉の葛野かづのを見れば百千足る家庭やにはも見ゆ (美由) 国の秀ほも見ゆ (美由) (『古事記』)

我妹子が思へりしくしおもかげに見ゆ (三湯) (『万葉集』)

【受け身】…人から見られる

もの思ふと人には見えじ下紐の下ゆ恋ふるに月そ経にける (『万葉集』)

【可能】…見ることができる

秋来ぬと目にはさやかに見えねども・・・ (『古今集』)

同様の例に記紀歌謡に見られる「射ゆ」があるが、これは連体形であるべきところに「射ゆる」ではなく「射ゆ」となっており、疑問の残る用例である。

射ゆ(諭) 鹿をつなぐ川辺の若草の若くありきと我が思はなくに (『日本書紀』)

「見ゆ」も他の下二段動詞同様、中世の一段化現象を受け、現代では下一段動詞「見える」になっている。「聞こえる」「おぼえる」もそれぞれ「聞こゆ」「おぼゆ」から来ている。また、「煮える」も「煮ゆ」が一段化したものであり、「見ゆ」と同じく、「煮る」は上一段動詞なのに「ら」が入っていない。

3 「ら抜き言葉」に対する社会的評価

3-1. 第20期国語審議会経過報告(1995)

第20期国語審議会経過報告において、「語彙・語法等の問題」の一つとして「いわゆる『ら抜き言葉』」が取り上げられている。ここでは、「話し言葉として昭和初期から現れ、戦後さらに増加したものである。」として、「可能の意味に用い、受身・自発・尊敬と区別することは合理的であり、可能動詞形として認めようとする考え方や話し言葉としては認めてもよいのではないかという考え方もある。」とある程度認めながら、「新聞などでは用いられていない」とし、平成7年の世論調査でも「食べれない」「来れる」「考えられない」を使わず、「食べられない」「来られる」「考えられない」を使うという答えが平均7割を上回ったことから、「共通語においては改まった場での「ら抜き言葉」の使用は現時点では認知しかねるとすべきであろう。」としている。ただし、次の3つの観点から今後の動向を見守っていく必要があるという。

- ① 話し言葉か書き言葉かによっても、違う面があること。
- ② 一段動詞全体のどこまで及ぶか。語形の長さや使用頻度、また、活用形によって、「ら抜き」化の程度が異なると思われること。
- ③ 北陸から中部にかけての地域及び北海道など、従来「ら抜き言葉」を多く使う地域があるといった地域差の問題を考慮する必要があること。また、近年は東京語自体も様々な地域の言葉の流入によって変化しており、「ら抜き言葉」の方がリズムやスピード感があってよいとする声もあること。

3-2 平成 27 年度「国語に関する世論調査」(文化庁)

「ら抜き」に関する調査では、16歳以上の男女を対象に「食べれない」「来れますか」「考えれない」「見れた」「出れる」について使うか使わないかを調査している。このうち、「来れますか」「見れた」「出れる」を使う人は、「来られますか」「見られた」「出られる」とほぼ同数であった。「食べれない」は32%で、「食べられない」60.8%の約半数であったが、年齢別にみると、16～19歳では、「食べれない」48.8%、「食べられない」41.7%と、「ら抜き」のほうが多くなっている。時代とともに、ら抜き言葉の使用が増えており、20年前に「認知しかねる」と言っていた状況とは少し変わってきている。

しかし、「考えれない」だけは、どの年齢層も「考えられない」が90%近くを占め、「ら抜き」は10%程度に過ぎない。平成7年以降の調査を見ても比率にあまり変化は見られない。これは、「ら抜き」現象が短い単語から始まったという説を裏付けるものであり、少なくとも数十年単位では、すべての動詞に「ら抜き」が浸透するものではないということを示している。

3-3 教科書における「ら抜き言葉」

学校文法としては、従来通り「れる・られる」が受け身・可能・自発・尊敬という四つの意味を持つ助動詞として取り上げられ、可能動詞は五段動詞にだけ認めている。五段動詞に「れる」がついた形「読まれる」「書かれる」などはほとんど可能には用いられないが、そのことには触れていないようである。

それに対して『国語史要説』（金田弘他、秀英出版1988）など、大学で使用される教科書類では、すでに「可能動詞も（近世）後期には、四段活用の多くに派生するようになる」とし、「昭和期になると、上一段・下一段・カ変動詞にも及び、『見れる・起きれる・受けれる・来れる』などの例が見られるようになった」として、葛西善蔵（1919）『子をつれて』の「その花の一つも見れずに追ひたてられて行く・・・」小林多喜二（1929）『蟹工船』「朝起きれなくなった。」¹川端康成（1935）『雪国』「来れやしない。……遊びに来れないね。」の例が挙げられている。

3-4 日本語教育における可能動詞

日本語教育においては、「れる・られる」だけはずして可能の助動詞という捉え方はせず、「読める」「食べられる」を一つの動詞の可能形と捉えるが、作り方は、五段動詞と一段動詞を別々に提出する。五段動詞の可能形は「eる」と語尾を変化させて「読める」「書ける」という下一段動詞に、一段動詞の可能形は受け身と同じ「見られる」「出られる」に、不規則動詞の「来る」は「来られる」、「する」は「できる」となるという、変則的なルールであ

る。「読まれる」「行かれる」のような、五段動詞に「れる」がついた形は可能形としては提出されない。国語教育においては、依然として「れる・られる」に可能も含め四つの意味を認めているが、日本語教育においては、一段動詞に「られる」がついた形のみ可能形として提出し、それに対する五段動詞の可能形は「読める」「書ける」のような下一段活用の可能動詞を挙げるといふ、学習者にとってわかりにくいアンバランスなものになっている。五段動詞に「れる」がついた形を可能形として教えないのは、日本語教育の文法は日本語を母語としない人が日本語を学ぶためのものであるため、国語における学校文法より早く現在の日本語事情に合わせる必要があるためであろう。

いわゆる「ら抜き言葉」を正規の可能動詞として認めれば、五段動詞も一段動詞も辞書形「読む」「食べる」の語尾の母音「u」を「e」に変えれば「読める」「食べれる」という可能形ができる、と一貫した説明ができ（不規則動詞「来る」「する」は例外として残るが）、日本語学習者もかなり楽になると思われるが、現状では、やはり「ら抜き言葉」に違和感を持つ人も多く、特に長い一段動詞もすべて機械的に「考えれる」「積み重ねれる」などと「ら抜き言葉」にされてしまうと受け入れがたいというところだろう。

おわりに

以上のように「ら抜き言葉」は、単なる言葉の乱れではなく、歴史的必然的变化と言えるが、といてすぐさま「ら抜き言葉」を広めよう、というのではない。やはり、今の段階では、どこか品のない言い方のように聞こえ、違和感、反感を持つ人がいることも否定できない。友人・家族など親しい人との砕けた会話では使っても、改まった場での発言や書き言葉では使わないようにする、などの配慮が必要であろう。教養ある人間としてふるまいたいときなどは使わず、かといって人が使うのを咎めたりせずに受け入れる、というのが「言語変化の中間段階にいる」（井上 1998）我々が取るべき姿勢ではないだろうか。

【註】

- 1 『日本文学全集 37 葉山嘉樹・小林多喜二・徳永直』（1975、筑摩書房）では、「朝、起きられなくなった。」とされている。

【参考文献】

- 『日本語ウォッチング』井上史雄（1998）岩波新書 540
- 「話し言葉の表現としてのラ抜き言葉に関する研究概観」張麗（2009）『コーパスに基づく言語学教育研究報告1 コーパスを用いた言語研究の可能性』富盛伸夫・峰岸真琴・川口裕司（編）pp.173-189 東京外国語大学大学院地域文化研究科
- 『カラー版新国語便覧』稲賀敬二監修（1990）教育図書出版第一学習社
- 『新訂国語史要説』金田弘・宮腰賢（1988）秀英出版
- 『初級日本語 下』東京外国語大学留学生日本語教育センター編（2010）凡人社
- 『直接法で教える日本語』伊丹千恵他編集（2009）東京外国語大学出版会
- 『初級日本語文法総まとめポイント 20』友松悦子・和栗雅子（2004）スリーエー
- 『時代別国語大辞典上代編』（1967）三省堂
- 『日本文学全集 29 宇野浩二・葛西善蔵・牧野信一』（1975）筑摩書房
- 『日本文学全集 37 葉山嘉樹・小林多喜二・徳永直』（1975）筑摩書房
- デジタル大辞泉（<https://kotobank.jp/word/%E3%82%89%E6%8A%9C%E3%81%8D%E8%A8%80%E8%91%89-656381> 2017.7.25 閲覧）
- 第 20 期国語審議会「新しい時代に応じた国語施策について（審議経過報告）」（文化庁）http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/tosin03/09.html（2017.8.30 閲覧）
- 平成 27 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要（文化庁）http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/h27_chosa_kekka.pdf（2017.7.25 閲覧）